



ジェンダー差別のない世界へ

富山県立大門高等学校 2年 梶田 栞里

「女の子なんだから、短大で充分だよ」昔祖母から言われた言葉です。当時の私は小学校にあがったくらい歳の頃でしょうか、幼心に随分気の早い話だと思ったのを覚えています。無知な子供は高等教育機関への進学状況など一切分かりませんし、身近な大人がそう言うのだから、そういうものなのだろうと思いついていました。

高校受験が近づいてきた頃、可能な限り遠い将来の自分について想像してみました。そのときふと、祖母の言葉が脳裏を過ぎったのです。私は短大に進学するのだろうか？その自問に答えを出すには時期尚早で、答えを模索することはやめました。しかし、祖母の言葉だけが妙に頭に残り、私は何度もそれを反芻していました。

数日後、ネットニュースを見ていたときのことで、「ジェンダー」「フェミニスト」といった文字とともに世界的に有名な英国出身の女優の写真が目にとまりました。彼女は時には笑顔で、時には真摯な表情でジェンダーの平等を訴えました。その記事を読み終えたとき、腑に落ちました。祖母の言葉のうち、「女の子なんだから」という枕詞が私の無意識の琴線に触れていたのです。もし私が男だったなら、祖母が私にかけた言葉は違っていたのだろうか。女には学歴やキャリアは不要なのだろうか。なぜそんな風潮が生まれたのか。堰を切ったように次々と疑問が溢れ出しました。男尊女卑という言葉について、初めて深く考えた瞬間でした。

その時期行っていた社会科は公民で、性差別についての項も授業で触れました。高度経済成長期のサービス業の広がりにより、女性の社会進出が広まったとありました。さらに、1986年には男女雇用機会均等法が、1999年には男女共同参画社会基本法が制定されています。遅々とした速度ではありますが、日本のジェンダーの壁は薄く、低くなりつつあるように思えます。しかし、これらはまだまだ形骸的な法と言えるでしょう。その実、多角的に鑑みて、こと労働環境においては女性は圧倒的に不利です。男女の賃金にはかなりの差がありますし、そもそも女性は非正規雇用の割合が男性よりはるかに高いです。男女平等を謳っている日本ですが、実が伴うのは当分先のようなようです。

焦点を拡大し海外にも目を向けてみます。2015年に世界145カ国を対象に行ったジェンダーギャップのランキングで、最も男女が平等だとされた国はアイスランド。末位は中東の共和制国家であるイエメン。日本の順位は101位でした。遺憾にもワーストに選ばれたイエメンでは、どのようなジェンダーギャップが存在するのでしょうか。まずは、識字率。男性76パーセントに対し女性は39パーセント。男性の約半分の割合です。他にも、就業率で比較した場合男性は70パーセントで女性は20パーセントです。差がここまで顕著に数字として現れているとは思わず、驚かされました。データだけでなく、この事実を知らなかった自分にもです。私は、ジェンダー差別の最大の問題点はここにあると思います。私を含む多くの人の、ジェンダーに関する問題への関心の低さです。各国行政は性差をなくすため既に動き始めています。残るは人々の意識の変革です。それが遂げられた時こそ、前述した形骸的な法の中身が満たされ、真の男女平等が叶うのです。

以前は女性が男性のように活躍しようとする「女性のくせに」と非難の言葉が投げられました。近年は贅辞として「女性なのに」と角の取れた言葉が用いられ始めましたが、そういった類の言葉が使われているうちは男女平等とは言えません。ジェンダー差別をなくすためには、男女が互いに尊重し合い一人一人が尽力することが必要だと思います。